

端麗なる戦場

— 軍記物語のいくさの表象とその来由についての試論 —

オオツ
大津 雄一
ユウイチ

一 はじめに

かつて小西甚一は、覚一本『平家物語』には死に伴う血の描写は一つもないと言った⁽¹⁾。確かに斬られたり、あるいは射られたりして傷口から血を流して死ぬというような描写は、延慶本にはいくつか見られるが、覚一本にはない。それは、覚一本が浄土宗の影響を受けて、死を極楽浄土へ赴く過程の一つとして理解し、死を観想的にとらえているからだ⁽²⁾と、小西は指摘する。

少ないことは確かだが、覚一本に血の描写がまったくないというわけではない。佐倉由泰は、覚一本が負傷による流血を表現するのはわずかに六例しかない⁽³⁾と指摘する。その中で戦闘による死傷の流血は、以下の四例である。

馬には人、ひとには馬、落かさなりく、さばかり深き谷一つを、平家の勢七万余騎でぞうめたりける。巖泉血を流し、死骸丘をなせり。(巻七・俱利伽羅落)

其後は、「よき人をば乗すとも、雑人共をば乗すべからず」とて、太刀・長刀で薙がせけり。かくする事とは知ながら、乗せじとする舟にとりつき、つかみつき、或はうでうちきられ、或はひぢうち落されて、一の谷の汀

(1)

にあけになつてぞ並み臥したる。(巻九・坂落)

矢倉のまへ、逆も木のしたには、人馬のしゝむら山のごとし。一谷の小篠原、緑の色をひきかへて、うす紅にぞ成にける。(巻九・落足)

海上には赤旗、赤じるしなげ捨て、かなぐり捨てたりければ、竜田川の紅葉ばを嵐の吹散らしたるがごとし。みぎはによするしら浪も、うすぐれなるにぞなりにける。(巻十・内侍所都入)

佐倉は表現の誇張や様式化によって、覚一本は過剰なまでに表現世界から血を払拭し、隠蔽し、生々しさや凄惨さを極力回避していると指摘する。

歴史学者の坂井孝一も軍記の血の叙述の少なさについて、ヨーロッパの中世叙事詩や中国の文献と比較して指摘し、比較宗教史の中村生雄の説を援用して、神人供食の祭儀が行われる日本では、ヨーロッパの供犠の文化が一般的ではなかったからであろうと推測する。⁴⁾

軍記物語が、「いくさ」という暴力をどのように描いたのかは、軍記物語研究の基本的な問題であり、その研究者に許された特権である。人間は、常に暴力と共にあり、そしてその発動を抑制しなければならないと考えている。だから先人がどのように暴力を表象して来たかを知ることが必要なことである。しかし正面からこれを解明しようとした論は決して多くはない。小西や坂井の発言は例外的である。軍記物語あるいは『平家物語』の戦場には残酷さが感じられないという現象の指摘は、紹介した以外にもいくつかある。しかし、ではどうしてそうなるのか、そ

の理由は何かということについての発言は少ない。それは、おそらく従来の古典研究の方法ではこの問題に十分にはアプローチできないからだ。私はこの問題についてすでに二編の論文を公表しているが、⁽⁵⁾今回このようなオープンな場を与えられたので、それらを踏まえて一つの試論を示したい。

二 叙事詩の世界

ホメロスの叙事詩を読むと血どころではない。戦い方や武器が異なるので軍記物語との単純な比較はできないが、体内のさまざまなものが青銅の槍の矛先や太刀の衝撃によって飛び出す。脳、骨髄、眼球や内臓が噴出し、中には飛び出す内臓を両手で必死に押さえる兵士もいる。身をよじって苦悶して無惨な死を遂げた兵士の死体は、二輪の戦車で引きずり回され、戦車は血まみれとなり、放置された多くの死体は車輪や馬の蹄に踏みつけられて原形を留めなくなる。そして、腐敗してどろどろに溶けて、野犬や蛆虫の餌食となる。以下に『イリアス』からいくつかの例を示す。⁽⁶⁾

ペイサンドロスは心中ほくそ笑み、勝利はわがものと思ったが、アトレウスの子は、銀鋌打った太刀を抜いてペイサンドロスに躍りかかる。こちらは盾の下から、見事な青銅造りの斧、よく磨かれた長いオリブ材の柄のついたのを取り出して、二人は同時に相手に迫り、ペイサンドロスが馬毛の飾りの兜の角、飾毛の下の一面上の辺りに斬りつければ、一方は向かって来る相手の額——鼻の付け根の上を斬り、骨が音を立てて裂けたかを見ると血塗れになった二つの眼球が足下の砂中に落ち、彼もまた前方に身をかがめて倒れた。(第十三歌)

脚速き勇将アキレウスは、傍らを走り過ぎる彼の胴の真ん中に背後から槍を投げ当てたが、そこは帯を締める黄金の留金が合わさって、胸当が二重に重なるところ、槍の穂先はそこをずぶりと貫いて、臍の辺りに突き出ると、たまらず一声呻いて膝から崩れ、黒い雲が彼を蔽ったが、倒れながらもわが手で臓腑を掴み身のうちへ納めようとす。 (第二十歌)

トロスが嘆願しようと、アキレウスの膝に手をかけると、相手は太刀で肝の辺りに斬りつける。肝は外にこぼれ出て、そこから流れ出す赤黒い血が上衣の懐を満たし、息絶えんとする彼の両眼を闇が蔽った。ついではムリオスに近づき槍で耳の辺りを突けば、青銅の穂先はそのままずぶりと刺さってもう一つの耳からぬっと出る。次に柄ある太刀でアゲノルの子、エケクロスの頭の真ん中に斬りつけければ、刃は一面血に塗れて生温かく、エケクロスの両眼をどす黒い死と過酷な運命とがぴたりと閉じた。ついでデウカリオンを襲い、その腕の肱の筋が合わさる辺りを青銅の穂先で刺すと、腕をだらりと下げて、死の影を目の前に眺めつつ踏み留まったが、太刀で頸に斬りつけ、その首を兜ごと遠くへ飛ばす。脊椎から髓が迸り出て、地面に長々と延びて横たわった。(中略)それはあたかも乾いた山の深い谷間を、凄まじい猛火が荒れ狂って、深い木立が燃え、風が焰を巻き上げながら八方へ転がしてゆくかのよう、そのようにアキレウスが、槍を手に敵勢を追い討ちながら、鬼神の如く八方に駆け廻れば、大地は血の海となった。それはまた、額の広い雄牛を軛にかけて、巧みにしつらえた麦打ち場で白い大麦を踏ませる時のよう、見る間に麦の粒は、声高く唸る牛の足下で皮をむかれてゆく――そのように剛勇アキレスが走らす車の下では、馬どもが死体を楯ももろともに踏みつけてゆく。下の車軸は一面に、また車体にめぐらした手摺りも、馬の蹄や車輪の輪縁から跳ねかえる血飛沫を浴びて血塗れとなる。無敵の剛

腕は血に塗れながらも、ペレウスの子はひたすら功名をたてんと逸り立っていた。(第二十歌)

戦場の実際を知らない私には、これこそが戦場であると断言することはできないが、第一次世界大戦後に書かれた小説など、たとえばエーリッヒ・レマルクの『西部戦線異状なし』、アーネスト・ヘミングウェイの『死者の博物館』、エルンスト・ユンガールの『鋼鉄の嵐の中で』を読めば、そのようなおぞましい状況があったであろうことは想像できる。

中世の叙事詩になるとさすがに脳や骨髄が飛び出すというような描写は少なくなるが、それでもたとえばフランスの『ローランの歌』では、内臓や脳漿や眼球は飛び出し、皮膚は削がれて頭骨がむき出しになり、苦悶の様も描かれる⁽⁵⁾。

血まみれとなって斃れ、／そのくるしむありさま、げに眼を蔽わしめるものあり。／あるいはあおむくあり、／うつ伏せるあり、折り重なって死す。(二二四)「」は改行を示す。

伯ローラン、斃れたる僧正を打ち眺めるに、／臓腑はそとにはみ出し、／脳漿額を蔽う惨状なり。(二六七)

王マルシルはサラゴッスに逃げ帰りぬ。／橄欖の木の下蔭に駒を降り、／剣を投げ出し、甲冑を脱ぎ棄て、／緑なす草の上にいぎたなく横臥す。／右腕は手首より斬り落されて、／ふき出ざる血汐のために、苦しみて気を失いぬ。(二八七)

異教の大王は大剛の強者なり。／シャルルマーニユの、褐色に輝く鉄兜めがけて斬りつけたれば、／兜の鉢を打ち割りて、／刃は御髪を切り取り、／常より少し大きい目の皮膚を削ぎ落せり。(二六一)

ドイツの『ニーベルンゲンの歌』では、脳漿や眼球や内臓が飛び出すことはないが、殺戮の場は血の海となる。イギリスの中世史家リチャード・カウパーは、ヨーロッパ中世の騎士の物語について論じ、そこにどのような過激な暴力シーンがあるのかを調べ、十三世紀に成立したというアーサー王伝説で有名な騎士の物語、『ランスロット』について以下のように指摘する。⁽⁸⁾

数量化できる事例に限っていえば、少なくとも八つの頭蓋骨が割られ(目まで、歯まで、あるいは顎まで)、馬から落とされた男性八人が意図的に勝者の軍馬の巨大な蹄で踏みつぶされ(その結果、彼らは何度も苦しみ悶えながら失神した)、五人の首が刎ねられ、二人が肩から下を切り落とされ、三人の手が切り落とされ、三人の腕がそれぞれ異なる位置で切断され、一人の騎士が燃える炎の中に投げ込まれ、二人の騎士が突然の死を迎えた。一人の女性が騎士の手によって鉄帯で体を巻かれて苦痛にあえぎ、もう一人は神の手によって煮え湯の入った桶に何年も浸けられ、もう一人は投げられた槍があと少しで命中しそうになった。女性たちは頻繁に誘拐され、ある時点では四十人がレイプされた。四人の騎士が驚異的な兵器で負傷した。(中略)ある競技会では、ランスロットは最初に対決した相手を槍で刺し殺し、次に剣を抜いて「右へ左へと突きまくり、馬や騎士を一気にまとめて殺した。足や手、頭や腕、肩や腿が次々に切り落とされ、彼より身分の上の者は出会うそばから切り倒されて、あとには悲惨な光景が残るだけだった。彼が通り過ぎたあと、あたりは一面の血の海となった」。

これ読むと、騎士は紳士であるなどという騎士道の言説などとても信じられない。

三 『後三年合戦絵詞』の世界

日本にもおどましい戦場の風景を描いた作品がある。それは、『後三年合戦絵詞』である。最近の野中哲照の研究で、『後三年合戦絵詞』は現在伝わる貞和三年（一三四七）成立本とほぼ同じものが、十二世紀前半（野中の主張によれば天治元年（一一二四）には成立していたことが明らかにされた⁹）。この絵詞が残酷な表現に満ちていることは早くから指摘されている。大量の血と、数多くの首、むくろ、切り落とされた手足が描かれる。金沢の柵では、兵糧攻めにあって城中から逃げて来た女・子どもが城兵のしている前で殺される。絵には、切り落とされた女の首が血潮とともに仰向けに転がり、うつ伏したそのむくろの胸元からは赤子の顔が見え、その赤子の斬り落とされた小さな手が転がっている。異様に膨れ上がり黒ずんだ死体が積み重なり、首棚に並べられた首の傷口は生々しく大きく開き、中には色が変わり死斑が浮かび出ているものもある。戦場は腐臭に包まれていたことであろう。

そして何よりもおどましいのが清原武衡の「めのと」である千任の処刑である。詞書には、

次に千任丸を召し出でて、「先日、櫓の上にて言ひしこと、ただ今、申してんや」と言ふ。千任首を垂れて物言はず。その舌を切るべき由を掟つ。源直といふ者、寄りて手もちて舌を引き出ださむとす。將軍、大きに怒りて言はく、「虎の口に手を入れむとす。はなはだ愚かなり」と追ひ立つ。異兵出でて来て、箆より鉄箸を取り出でて、舌を挟まむとするに、千任、齒を食ひ合はせて開かず。鉄箸にて齒を突き破りて、その舌を引き出でて、これを切りつ。千任が舌をきり了りて、縛り屈めて、木の枝に吊り架けて、足を地に付けずして、足の下

に武衡が首を置きり。千任、泣く泣く足を屈めて、これを踏まず。しばらくありて、力尽きて、足を下げて、つひに主の首を踏みつ。將軍、これを見て、郎等どもに言ふやう、「二年の愁眉、今日すでに開けぬ。ただし、なほ憾むるところは、家衡が首を見ざることを」と言ふ。

とある。⁽¹⁰⁾

詞戦いで源義家を挑発した千任は、捕らえられ、金ばさみ(やつとこ)で齒を突き破られ、舌を引き出されて切れ、柳の木に吊るされる。その足元には主人の武衡の首が置かれ、千任はそれを踏まないように足をかかめるが、力尽きて踏む。それを見て義家は満足の意を表す。この処刑が残酷なのは、緩慢な死が与えられているからである。私たちは、千任の生から死への移行の時間、齒の破壊から始まる激痛に満ちたその絶望的な時間の継続に恐怖する。そしてその苦しみを見て満足する義家の姿に、悪魔的暴力に魅了された人間の姿を確認することになる。

絵巻には義家の前で二人の武士に取り押さえられた千任の舌をもう一人の武士が金ばさみではさんで引き出し、腰刀を手を今まさに斬ろうとしている場面が描かれる。三人のうち二人は笑みを浮かべている。続けて上半身裸で柳の木に宙づりにされた千任の姿が描かれる。力なくうな垂れ、口からは血が流れ、足元に武衡の首がやや上向きに置かれている。

ちなみに、アッシリア王アシウルナシルパル二世は残酷さで知られているが、彼は、敵の手をどのように切断し、その舌をどうやって抜くのか、生身の敵をいかにして串刺しにし、皮を剥ぎ、いかにして壁の中に封じこめるのかを、自慢げに人々に説明したという。⁽¹¹⁾舌を抜くのは地獄絵の中の作りごとではない。源義家はアシウルナシルパル二世の末裔である。

人が凄惨な死や、破壊された死体に魅かれることは普遍的なことだ。スーザン・ソングによれば、人がこの欲望に打ち負かされた最も古い例はプラトンの『国家』第四巻に記されるアグライオンの子レオンテイオスの話である⁽¹²⁾。

ペイライエウスから、北の城壁の外側に沿ってやって来る途中、処刑吏のそばに屍体が横たわっているのに気づき、見たいという欲望にとらえられると同時に、他方では嫌悪の気持ちをはたらい、身をひるがえそうとした。そしてしばらくは、そうやって心の中で闘いながら顔をおおっていたが、ついに欲望に打ち負かされて、目をかっと思開き、屍体のところへ駆け寄ってこう叫んだというのだ。「さあお前たち、呪われたやつらめ、この美しい観物を堪能するまで味わうがよい！」⁽¹³⁾。

この欲望の存在を認めなければ、人体が切りはなたれ血が吹きあがるスプラッター映画が現在でも一定の人気がある事を説明ができない。その背後にはサド・マゾキズムの衝動、さらには「死の欲動」があるのだろう。日本人にだけそれがないというのは考えられない。少ないとはいえ、『後二年合戦絵詞』も、地獄絵や九相図などもある。

四 軍記物語の戦場

視覚の欲望を充足しようという絵巻と文字だけによる軍記物語との相違は考えなければならぬが、むき出しの暴力とその結果としての悲惨な戦場の様子を軍記物語は書かない。『後二年合戦絵詞』は孤立している。

もちろん『将門記』『陸奥話記』、そして『保元物語』『平治物語』などにいくさの凄惨さがまったく描かれてい

いというわけではない。しかし、それらはおおむね様式的な表現で具体性に欠ける。ただ、『平治物語』には他の軍記と比べると凄惨な場面がいくつもある。斬首された藤原信頼のむくろの背筋にたまった血が雨に流されるといふ表現はリアルであり、源義朝を謀殺した長田忠致・景致父子が、義朝の墓の前に敷かれた板に左右の手足を釘付けにされ、爪を剥がれ、顔の皮を剥がれて、四、五日かけてなぶり殺しにされたという記述は、千任の処刑を想起させる。『平治物語絵詞』には、掘り出された信西の首が切断される場面が描かれる。

『太平記』では、金ヶ崎城に籠城した新田勢の兵糧が尽き、死人の股肉を切り取り、一口ずつ食って力をつけて城から打って出た話や（巻十八・金崎城落つる事）、塩谷判官の身重の妻が高師直の追手に追い詰められ、もはやこれまでと、一族の者に五歳の子とともに刺し殺されて焼かれ、胎内にいた子が半ば腹から出て血と灰にまみれていたという話には凄惨さがあるのだが（巻二十一・塩谷判官讒死の事）、一方で切腹してはらわたを手繰り出して酒の肴だと進めたり、自分の首を掻き落として片手に提げたり、誇張が過ぎる場面があまりにも多く、全体が滑稽な印象に覆われてしまう。

延慶本『平家物語』には、生々しい戦場の場面があると水原一は指摘している。薩摩守忠度の刺した刀が、岡部忠澄の頬を貫いて刃先が三寸ほど後ろに出る場面、師盛の首が顎を胴に付けたまま切り落とされる場面、通盛が胴に刺し込まれた太刀で中を抉られるようにして討死する場面をあげる。小西甚一は、延慶本巻一末の藤原頼長の遺体検分の記事に「色相と変異シテ臃腫爛壞シ給ヘリ 支節分散シテ膿血溢流レタリ 悪香充滿シテ不浄出現セリ」とあることを指摘する。戦場ではないが、ここには確かに腐乱した死骸の様がある。『延慶本平家物語全注釈』は、これは死体の不浄を説く『往生要集』の影響を受けているとする。しかしながら、物語全体からすれば凄惨な場面は少ない。そして覚一本にはこれらの描写はない。

覚一本『平家物語』でも、もちろん多くの人間が殺戮され、多くの首が取られるが、悪魔的暴力が語られることはなく、脳や脳漿や脊髓や目玉が噴出することもなく、流血は控えめで、傷ついた者の呻き声も聞こえず、死体の破壊や腐乱も語られない。凄惨さを感じさせるのは口を裂いたという西光の処刑の場面くらいである（巻二・西光被斬）。一の谷の合戦で「人馬のししむら山のごとし」と語られるが、その死体の具体的様子が語られることもない。斬首された平重衡のむくろが、夏のことであったので「あらぬ様」になったと婉曲的に語られる程度である（巻十・重衡被斬）。たとえば薩摩守忠度は、顔を突かれ腕を斬られるが、痛みに苦悶することもなく、最期の十念を静かに唱えようとする。その平然とした姿によって、血まみれであったはずの彼の顔や、腰刀を握ったまま切り落とされて傍に転がっているはずの腕や、斬り落とされた傷口から噴き出ているはずの大量の血は見えなくなる。

五 アブジェクション

軍記物語、とりわけ覚一本『平家物語』の描く戦場には凄惨さや醜悪さがない。それはなぜかを考える上で、ジュリア・クリステヴァのアブジェクション (abjection) / おぞましきもの (棄却) の理論は有効であろう。⁽¹⁵⁾

クリステヴァによれば、主体客体未分化の状態にある幼児は、自身と融合した状態にある母親を「おぞましきもの (アブジェクト)」として「棄却」して母親への依存から脱却しようと試み、その結果人間は母性Ⅱ自然的本質から離脱して父権的な象徴秩序の世界へ参入し、文化的社会の一員となるのだという。これが、個のレベルから集団のレベルへと移行すると、社会において同一性や組織や秩序を妨害し、境界や場所や規範を尊重しないものは「おぞましきもの」と認識され、穢れたものとして棄却される。

穢れたものは、排泄物、死体、経血と関係があり、これらの物質は、生殖の営みにおける母の絶対不可欠な役割、

幼児の肛門括約筋の自己調節に際しての母親の決定的働きゆえに、母なるものに由来するのであり、それゆえ棄却されなければならない。

身体の境界から外に排出されたものである糞便・尿・血・体液・膿、そして生を脅かす死体・病、あるいはそれらに関連する境界的存在は「おぞましきもの」であり、人間の生活や文化が自らを維持していくためにその侵入を許さず、周縁へと排除しなければならぬものである。その行為がアブジェクションである。父権的原理に強く支配された社会では母性的原理への屈服は社会秩序の崩壊の危機となる。

『平家物語』に限らず、軍記物語は秩序を重んじ保守的である。権力への反逆の事件を語りながら結局のところ権力の絶対性を語る物語であることはすでに述べたことがある。⁽¹⁶⁾ 共同体の危機と回復を物語って共同体の正当性を教育する。軍記物語が共同体の歴史、物語である以上それは必然のことだ。清盛や西光のような秩序を乱す成り上がり者は忌避される。源三位頼政の挙兵は、大人しくしていればよいものを、「よしなき謀叛」を起こしたと非難される。秩序を乱すものは許されない。そしてその秩序は父権的原理によって成り立っている。

『平家物語』は、典型的な父権的象徴秩序の物語である。この物語の特徴の一つは父子の物語がとても多いということだ。物語の中軸には、清盛・重盛、重盛・維盛、維盛・六代と連鎖する平家嫡流の父子の物語がある。宗盛と清宗・副将の物語、知盛と知章の物語もある。

後白河と高倉の物語もある。高倉天皇は父の後白河上皇が鳥羽殿へ幽閉されると食事も喉を通らなくなり、父のために祈り続け、退位後の厳島御幸の際には鳥羽殿の父を訪ねて対面する、久しぶりの再会に後白河は涙を流して語り合う。鳥羽殿を去った後、高倉は後白河の鳥羽殿での生活に心を痛め、後白河は高倉の旅泊を思い遣る（巻三・法皇被流、城南之離宮）。治承五年の正月に高倉が崩御した際には、後白河は涙を流し、語り手はその心中を、「悲しみ

の至つて悲しきは、老いて後子におくれたるよりも悲しきはなし。恨みの至つて恨しきは、若して親に先立つよりもうらめしきはなし」と、大江朝綱の詩の一節を引いて哀れむ（巻六・小督）。

丹波少将成経は、舅の平教盛の尽力によって命を助けられるが、父新大納言成親のことを思い、命の惜しいのも父ともう一度対面するためであり、それがだめならば父と同じ場所で死ねるようにしてほしいと訴える。娘婿ゆえにいらぬ心配をするはめになったことを、「あはれ、人の子をば持まじけるものかな」と嘆いていた教盛は、この成経の訴えを聞いて、「子ならざらむ者は、誰かたゞ今、我が身の上をさしおいて、是ほどまでは悦べき。まことの契りは親子のなかにぞありける。子をば人の持つべかりける物哉」と思い直す（巻二・少将乞請）。成経は、鬼界が島へ流される道中では備前国有木の別所にいる父を思いやり、赦されて都へ帰る際には有木の別所を訪れて父の供養をし（巻二・阿古屋松）、鳥羽にあつた父の山荘を訪れ、恋しさのあまりに涙を流す（巻三・少将都帰）。その成経も二人の子の父である。都に帰つて、六歳となつた子と流されてから生まれた三歳の子と再会する。三歳の子と初めての対面した成経は涙を流す。また、鬼界が島に残された俊寛は、有王から息子の死を聞かされて絶望し、死を選ぶ（同・僧都死去）。

武士とても同じこと、上総守忠清と飛彈守景家は北国の合戦で、それぞれ子の忠綱と景高を失つた歎きで「なげき死」をし（巻七・還亡）、瀬尾兼康は不甲斐ない我が子を捨てて逃れようとするが引き返し、我が子の首を斬り落として討死する（巻八・瀬尾最期）。一の谷で梶原景時は、「世にあらんと思ふも子共がため、源太討たせて、命いきても何かはせん、かへせや」と孤立した源太景季を救い出し（巻九・二度之懸）、熊谷直実は、組み伏せた平教盛に傷を負つた我が子の小次郎直家重ねてしまい、首を切れなくなり、若武者の父の悲しみを思い遣る（同・敦盛最期）。源頼朝も、父義朝の遺骨を片瀬川まで出迎えて、泣く泣く鎌倉へ伴い、供養のために勝長寿院を建立する（巻十二・紺搔之沙汰）。

天皇家から武家まで家柄を問わず父と子との絆の強さは、美しいものとして語られる。それは、『平家物語』に特に顕著であるが、ほかの軍記物語も同じである。たとえば、『保元物語』などは天皇家・摂関家・源家の、それぞれの葛藤をも含めて描かれた父子の物語ともいえよう。

これはもちろん平安時代中頃から強くなったという家父長制度の自然な反映である。『平家物語』には女たちも多く出て来るが、彼女たちのほとんどは父権的原理に忠実な母であり妻であり恋人であり、無力な幼い娘たちである。この物語は父権的原理による秩序を自明とする物語である。だから、「おぞましきもの」を排除し、父権的象徴体系は守られなければならない。それがたとえ殺戮の場所であり、死体や腐敗や体液や悪魔的な暴力などのアブジェクトに満たされているはずの戦場を描く場合であっても、である。

アブジェクションの理論の基盤には、文化人類学者メアリー・ダグラスの『汚穢と禁忌』（塚本利明訳 ちくま学芸文庫二〇〇九）があるわけだが、母系制が優位であったり、あるいは残存していたりする社会においては、アブジェクションは「穢れの儀礼」として出現する。汚物は聖なる穢れ・不浄に格上げされ、それが排除されることによって共同体の同一性が確保される。平安中期からの穢れ意識の肥大化も、アブジェクションとして説明できるのであり、家父長制度の成立と無縁ではありえない。この国の社会制度の歴史的变化が、端麗なる戦場を生み出した背景として考えられる。

六 祝祭

さて、軍記物語の戦場が端麗である理由としては、軍記物語が戦場を祝祭の場として描いているということもあげられる。

不幸なことだが、人が、戦争を祝祭、カーニバルのように感じることは間違いない。戦争が停滞や退廃を一掃して共同体を再生し、新たな科学や芸術を生み出し、同胞愛や絆を強くし、道徳性を高めるといふ発言は枚挙にいとまがない。多くの発言が残されているが、一例だけ、ドストエフスキーの発言（ペテルスブルクの最も穏健で平和的な人の言葉と仮託されている）を「作家の日記」から引用すれば、¹⁷

好きでなくてどうする？ 戦争のときにしょんぼりしているやつがいるかい？ それどころかみんなたちまち元気づき、誰もかれもみんな精神が高揚し、平和なときに見られる、ありふれた無気力や倦怠を訴える声なんか聞こうたって聞かれやしない。それから戦争が終わったあとで、みんながどんなに戦争の思い出話を好むものか、たとえそれが戦争に敗れた場合でもだ！ それに戦争の最中には、顔を合わせると、みんなが頭を振りながら、『なんとという不幸なことだ、長生きなんかするものじゃない！』などと互いに話し合っているが、あんなことをそのまま信じてはいけない。あれはただのお体裁にすぎいなのだ。実はあれとは裏腹で、誰もが心の中はお祭気分になっているのだよ。

戦争こそは大衆にとって自分を尊敬するようになる機縁である。だからこそ民衆は戦争が好きなのだ。民衆は戦争についての歌を作る、民衆はその後いつまでも戦争についての言い伝えや物語に耳を傾ける……流された血はまことに厳肅なものである！ いいや、戦争は現代にあっては必要不可欠なものなのだ。戦争がなかったら世界は崩壊してしまうか、それでなければ、すくなくとも、なにかどろどろしたもの、病毒に感染して腐った傷口の、いやらしい膿かなにかのようなものになってしまいうに相違ない……

とある。

戦争が祝祭の代替物であることを明確に論じたのはロジェ・カイヨワであろう。⁽¹⁸⁾

文明が抑圧する本能を戦争が満足させる。戦争の力を借りて本能は派手に仕返しをする。自分自身を破壊させ、自分のまわりの一切のものを破壊するのだ。自分から身をほろぼしてしまえば、あるいは、形あるもの名のあつものを傷つけることが許されるのであれば、無数の瑣末な禁止事項や慎重な気くばりのなかで暮らす疲労感、めざましいばかりに解消されることになろう。戦争とは社会を徹底的に攪乱するものであり、社会生活の絶頂点である。それは犠牲の時であるとともに、一切のルールが破棄される時でもある。死の危険の時ではあるが、そこにおいて死が聖化される以上、自己犠牲の時であり、また放縱の時でもある。これらの点で、戦争には現代世界において祭りの代わりをつとめ、祭りとおなじ魅惑と熱狂をひきおこす資格が全部そろっている。戦争は非人間的である。神的とみなすことも十分に可能なほどである。いやそうみなさないわけにはいかないだろう。この点にこそ、このもつとも強大な祭典に人びとが恍惚感、若々しさ、不滅を期待する理由があるのだから。

と論じる。

祭りでは神の名のもとに世界は混沌と化し、短期間に巨大な浪費が行われ、擾乱が独り歩きをし、陶醉が支配する。蕩尽と狂宴と秩序の侵犯や転倒、そして解放された暴力の快楽を享受することによって共同体の再生が図られる。パトスの、タナトスの過激性が世界を支配する。そしてそれは、確かに戦争が共有するものだ。ただ戦争で

は、富だけではなくより多くの生命が蕩尽されることが違う。人々は、戦争が世界を蘇らせる祝祭の一形式だと感じていたのである。

かつて兵藤裕己は、楠正成の赤坂城や千劍破城での合戦や、バサラ絵にさかんに描かれたという阿保と秋山の一騎打ちの場面を例としてあげて、『太平記』の合戦は本質的に見世物風であると指摘したが、⁽¹⁹⁾『平家物語』でも基本的には変わらない。林立する赤旗や白旗、あるいはこうこうと燃え上がる篝火・遠火、天も響き大地もゆるぐほどにあがる三度の鬨の声、矢合わせの音、矢叫び、色とりどりの華やかな軍装束、名乗りの声、それらが繰り返し描き出され、戦場を競技場と化し、晴れの場という祝祭空間として飾り立てる。カイヨワによれば、そのような儀礼化は中世ヨーロッパでも生じている。

巻四「橋合戦」の悪僧たちの戦いが、見世物的、パフォーマンス的であるとの指摘が佐伯真一にある。⁽²⁰⁾ そのほかたとえば、巻十「扇的」では戦場の全員が見物人となって那須与一の美技に喚声を上げる。景清とみおの屋の鏝引きにも見物人がいる。役者と観客と喝采、すべてがそうだとは言わないが、いくさは祭りの場で披露される見世物のように描かれる。笑いも祝祭の場には欠かせない。巻五富士川合戦では遁走する平家の姿に遊女たちが笑い合っている、巻九の宇治川合戦では大串重親の徒歩での先陣の名乗りが笑いを誘う。

巻八の法住寺合戦が、祝祭的であることについてはすでに阿部泰郎の論がある。⁽²¹⁾ 鼓判官という「をこの者」が道化の役割を担う。鼻の大きな豊後の国司、鼻豊後藤原頼輔は、衣装を剥ぎ取られ真っ裸になる。見かねた既知の間法師が投げ掛けた短い衣を頭から被るが、尻を露わにした滑稽な姿で、戦いの最中であるというのに貴族の邸宅を一軒一軒立ち止まって見物する。その姿を見て、見物人たちは手をたたいて笑う。⁽²²⁾ 頼輔も道化である。

私も、この合戦について分析したことがあるが、この合戦でより大きな道化の役割を担うのが木曾義仲である。

彼は、勝利の喜びの中で、院か天皇になろうと思うのだが、法師や童の姿となるのはおかしいだろうと言って、結局は院の厩の別当となる。そして法皇を幽閉し、意のままに四十九人の公卿を解官する。義仲という道化は、王の至高性を汚し、王を追放して王のように振る舞い、好き放題をし、秩序を攪乱する。不謹慎な発言による神聖なものへの冒瀆や格下げは、カーニバルにつきものである。そしてその罪を負って瞬く間に放逐されて粟津の松原で殺され、下落していた真の王が復活する。それは、まさにカーニバルの放縦王（ロード・オブ・ミスルール）あるいは偽王（モックキング）の戴冠と王位剥奪の儀式である。

七 共同体の物語

すでに述べたように、軍記物語の語りの基本構造は、つまるところ共同体の危機と回復である。今ある秩序の維持の物語である。『平家物語』では清盛や義仲によってもたらされた危機から、共同体は甦る。共同体の更新を描くという基本構造を持つ物語のいくさが、共同体の蘇生をはかる祝祭のように表現されるというのは、ごく自然なことである。

実は「おぞましきもの」、グロテスクなものも、日常に闖入する非日常のものとして祝祭の場を演出する。グロテスクな見世物は祭りに付き物である。しかし、『平家物語』、あるいは軍記物語は、『イリアス』などのように脳や脊髄や内臓や破壊された死体、むき出しの暴力といったグロテスクなもの「おぞましきもの」によって戦場を飾ろうとはしなかった。それは、すでに述べたようにこの物語が父権的原理に支配されていて、その象徴秩序を守るためにそれらをアブジェクションしたからである。その結果、戦場は祭りのように華やかで賑やかで端麗で、リアルからは遠いものとなる。

結局のところ、軍記物語の戦場がおおむね端麗であるのは、それらが共同体の原理に忠実に従っているからであるという結論になる。その優等生が覚一本『平家物語』である。

日本で、おぞましい戦場が描かれるのは近代になってから、いやヨーロッパから遅れて第二次世界大戦後ではないだろうか。

八 おわりに

最後に付け加えると、共同体というのは「ある規則を共有する意識の集合体」という意味で使用した。実体的集合を言っているのではないが、あえて言えば文字と知識を占有していた貴族階級とその周辺ということになる。もちろんそれは時代によって変化しているだろう。

また私は、誰かが、祝祭的に描こう、アブジェクションしようと思図して物語を書いたなどと言っているのではない。書いてみたら結果的にそうなってしまったのである。それこそが共同体の産物だというにふさわしい。

残した問題も多い。ヨーロッパ叙事詩ではなぜグロテスクな表現を日本よりも積極的に取り入れたのか、ヨーロッパでもそのような表現は中世を過ぎると減少してゆくのだが、父権的原理の浸透がアブジェクションとパラレルな関係にあるならば、なぜ日本だけがこれほどに排除を徹底したのか、この国ではとりわけ父権原理が強く働いたのだろうかなど、考えなければならぬことは多くある。

軍記物語は、いくさを描くだけの物語ではないが、人間と暴力について思考を廻らせるための貴重な遺産である。そしてそれらが現在十分に活用されているとは思えない。だからこそあえてこのような試論を提示した。

【注】

- (1) 小西甚一『日本文芸誌Ⅲ』（講談社 一九八六）。
- (2) 佐倉由泰『軍記物語の機構』（汲古書院 二〇一〇）。
- (3) 『平家物語（一）〜（四）』（梶原正昭・山下宏明 岩波文庫 一九九九）より引用。
- (4) 坂井孝一『曾我物語の史的研究』（吉川弘文館 二〇一四）。
- (5) 大津雄一「軍記と暴力」〔文学〕隔月刊十六卷二号 二〇一五・三）、『平家物語』という祝祭」〔古典遺産〕六十六号 二〇一六・三）。
- (6) ホメロス『イリアス（下）』（松平千秋訳 岩波文庫 一九九二）より引用。
- (7) 『ローランの歌 狐物語』（佐藤輝雄ほか訳 ちくま文庫 一九八六）より引用。
- (8) Richard W. Kaepfer, *Chivalry and the Civilizing Process, Violence in Medieval Society*, The Boydell Press, 2000.
- (9) 野中哲照『後三年記の成立』（汲古書院 二〇一四）。
- (10) 野中哲照『後三年記詳注』（汲古書院 二〇一五）より引用。
- (11) スティーブン・ピンカー『暴力の人類史 上・下』（幾島幸子・塩原通緒訳 青土社 二〇一五）、岸本通夫ほか『世界の歴史二 古代オリエン』（河出書房新社 一九八九）など参照。
- (12) スーザン・ソントグ『他者の苦痛へのまなざし』（北條文緒訳 みすず書房 二〇〇三）。
- (13) プラトン『国家（上）』（藤沢令夫訳 岩波文庫 一九七九）より引用。
- (14) 延慶本注釈の会『延慶本平家物語全注釈 第一末（巻二）』（汲古書院 二〇〇六）より引用。
- (15) ジュリア・クリステヴァ『恐怖の権力（アブジェクシオン） 試論』（枝川昌雄訳 法政大学出版社 一九八四）。
- (16) 大津雄一『軍記と王権のイデオロギー』（翰林書房 二〇〇五）を参照。
- (17) ドストエフスキー『作家の日記』『逆説家。』（小沼文彦訳『ドストエフスキー全集 十二・十三巻』筑摩書房 一九七六・一九八〇）より引用。なお注（5）拙稿『平家物語』という祝祭』で戦争礼賛の言説を示した。
- (18) ロジェ・カイヨワ『人間と聖なるもの』（塚原史ほか訳 せりか書房 一九九四）より引用。同『戦争論 われわれの内にひそむ女神ペローナ』（秋枝茂夫訳 法政大学出版社 一九七四）も参照。
- (19) 兵藤裕己『王権と物語』（岩波現代文庫 二〇一〇）。
- (20) 佐伯真一「異能の悪僧達——延慶本『平家物語』橋合戦の読み方」（『伝承文化の展望——日本の民俗・古典・芸能——』三弥井書店 二〇〇三）。
- (21) 阿部泰郎『聖者の推参 中世の声とラコなるもの』（名古屋大学出版会 二〇〇一）。
- (22) ミハイル・バフチン『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』（川端香男里訳 せりか書房 一九七三）を参照。

※シンポジウムでの報告に加筆・修正をして成稿した。